

増え続ける耕作放棄地

3月議会一般質問で、私は「耕作放棄地」の現状について尋ねました。農業委員会の資料では、鈴鹿市の農地は4690ha、その10.5%にあたる491haが「耕作放棄地」とされています。その内「作付けしていないが、直ちに耕作が可能な耕地」が268ha、「直ちに耕作できない、又は復元利用が不可能な耕地 = 荒廃地」が222haとなっています。

地区名	面積 ha
国府	33.2
加佐登	32.6
石薬師	51.5
稲生	29.4
河曲	24.6
栄	48.5
合川	83.6
椿	30.0
鈴峰	32.3
庄内	42.7

耕作放棄面積の多い地区は、左の表のとおりです。畑地の多い地域の放棄割合が高く、水田の多い地域は放棄地が少ないという格差があります。水田には米の所得補償（10a当り15000円）、転作への助成金（10a当り国35000円、市18000円）があるので、何とか耕作がされていますが、畑には所得補償など何もありません。

もし所得補償制度がなくなったり、TPPで米の輸入自由化になったら、水田の耕作放棄地化がいきに進むことになり、大変な事態になります。

農業と農地を守る抜本対策を

農水省の耕作放棄地再生利用を支援する事業はありますが、微々たるものです。それも「3年以上荒れた耕地を復元し作付けする」という条件が付いていて、「荒らさないために草刈りやトラクターで起こしている」だけでは、対象になりません。

私も田んぼ1枚と少しの畑を作っていますが、かろうじて荒らさない程度しか出来ません。周りの専業で頑張ってきた人たちも、高齢化や後継者難で、毎年リタイヤが続いています。このままでは、あと数年で農村の風景が変わってしまい、各地に荒野ができてしまいます。市だけでは出来ない、国レベルでの農政の大転換が求められます。

下水道会計は当分の間、一般会計からの持ち出しで運営

2012年度から下水道事業会計が、上水道事業と同じような「企業会計方式」に移行しました。形の上では独立した事業となりますが、上水道のような「独立採算」になるのは、ずっと先の予定で、当面は一般会計からの持ち出しで運営をして行かざるを得ません。

上水道は市内全域に配管網が完了していて、ほとんどの市民が使用しています。運営も水道料金収入ですべてまかなっていて、一般会計（市税）からの持ち出しはありません。

一方下水道はまだ事業拡大の途上にあり、普及率は50%ほどで、毎年20億円以上の投資を続けています。また下水道料金は、つないだ世帯からしか徴収されないのので、運営費をまかなうには全く足りません。その不足する分は、全部一般会計から補てんされます。12年度予算で32億円余と、大きな金額の持ち出しです。借金の残高も446億円と、一般会計の借金を上回っています。したがって、市の財政運営を見る場合には、この下水道会計を一般会計と合わせて考えることが不可欠です。

下水道会計と上水道会計の比較（2012年度予算）

	下水道会計	上水道会計
普及率	約50%	100%
料金収入	14.3億円	36.8億円
借入金残高	446億円	158億円
利息支払	10.3億円	4.2億円
元金返済	25.7億円	10.0億円
一般会計補てん	32億円	0

昭和22年からの歴史をもつ上水道事業と、まだ建設中の下水道事業を単純に比べることは適当ではありませんが、借金の大きさや一般会計からの持ち出しの大きさは、今後の市財政への影響を見るうえで参考になります。

議員在職25年、一般質問は100回に

7期目の選挙から1年がたち、ちょうど議員在職25年となりました。先の3月議会は、年4回の定例議会×25年=100回目。毎回かならず一般質問に立ってきたので、質問も100回となりました。とくにめでたい事でもないですが、しかし私にとっては大きな節目でありました。

約2倍の広さ！深伊沢小の新体育館



3月15日、新築されたわが母校・深伊沢小の体育館の完成を祝う会に出席しました。旧体育館の約2倍の広さとなり、天井も高く明るくなりました。さっそく19日に、6年生の卒業式が行なわれました。

私の子ども3人は旧体育館で過ごしましたが、ちょうど孫の1人目が2年生、2人目が新1年生と

なり、広々とした新館で過ごすこととなります。

この新体育館、本当は2年前に建設の順番だったのが、白子小が危ないということで順をゆずりました。その際に、遅れついでに後の計画だった「教室の増築」を前倒ししてと提案、体育館と一体に2教室が新設となりました。教室の付いた体育館というユニークな建物です。

いまだに「解放センター」という名称がそのまま残る建物

一ノ宮町にある「一ノ宮団地隣保館」と「一ノ宮団地児童センター」の玄関正面に、「一ノ宮解放センター」と大きな文字で表示されています。ところが施設名称としては、市の条例や施設案内のどこにも「解放センター」などとは書かれていません。「ジェフリー鈴鹿」のような愛称にもなっていません。私は生活産業委員会で、こんな公式名称でもないものを建物の正面に付けている事はおかしいので、外すように求めました。担当課は「これまで考えてもいなかった」ので、指摘の件について検討すると答えました。

「解放センター」とは、施設建設当時に市の同和行政を牛耳っていた部落解放同盟の影響で付いた名称だと推測されます。しかし、すでに同和对策も終結し、特別な別枠行政もほぼ無くなった現在、公立施設にこういう看板は無用だし、かえって有害です。

また私は、市庁舎から立体駐車場への通路の横に、大看板で「部落差別をなくそう」などと書いてあるのも、撤去を求めています。書くのなら「部落差別はなくなりました」と宣言するべきであると。

ずいそう



大地が動いて山になる

毎日見上げている鈴鹿の山々を、小さいときから「西の山」と呼んでいる。山は大昔からそこにあり、これからもそこにあり続ける、と思っていた。地球科学の研究者・藤岡換太郎氏の著書「山はどうしてできるのか」を読んで、山どころか大地がどんどん動いていて、今見ている山の景色は、動いている大地の「今の姿」に過ぎないということを知らされた。

東日本大震災によって、日本列島が何メートル動いたとか、陸地が何センチ下がったとか報道されているが、これも千万年単位の大地の変動のほんの一部ということだ。「太平洋プレート」が「ユーラシアプレート」の下に沈みこむ際に起こったのが巨大地震であるが、その太平洋プレートは日本のはるか東1万2千キロ沖で生まれ、1億年以上かけて日本列島まで移動してきたのだそうだ。

移動するプレートの集中する地震地帯・日本

もっと驚かされるのは、今のインド大陸が、もとは南極の方にあったのが2億5千万年前から北に移動してユーラシア大陸にぶつかり、上へ押し上げられて巨大なヒマラヤ山脈ができたという話だ。エベレストの頂上にアンモナイトの化石があるのは、その地層が昔は海にあった証明だというのである。日本で言えば、伊吹山や藤原岳に石灰岩があるのは、大昔のサンゴ礁の地層がいま高い山になっているから、などそれぞれの山や山脈ごとの歴史があって、今の形の山がある。「動かざること、山の如し」ではなく、「大地が動いて山になる」のである。

地球の表層は「プレート」と呼ばれる10数枚の岩盤からなり、各プレートが移動し「ぶつかる」「離れる」「すれ違う」という運動によって大きな変動が起こっている。その中でも日本列島は4つのプレートが集まり、地殻変動がきわめて活発な地域である。山々が多様な特徴を持ち、火山や温泉が多くあり、自然が豊かな国ではあるが、地震がひんぱんに起こることも避けられない。そんな国の海沿いに、活断層の上に原発を54基も作った人たちは、いったい何を勉強していたのだろう。「自分の時代には何も起こらないだろう」と、高をくくっていたとしか思えない。